

全海運所属組合の横顔

連載 第11回

中国地方海運組合連合会

その4 岡山県西南海運組合

【岡山県西南海運組合の概要】

事務局 〒714-0086 岡山県笠岡市五番町 5-79 MKビル 2階
 電話 0865-60-0340 FAX0865-60-0341
 JR 西日本・山陽本線「笠岡」駅下車徒歩約 17 分

理事長 山河 義弘 (有)三萬吉 代表取締役社長

事務局長 池田 文明 事務局長

事務局員数 男子 1 名 (事務局長含む)

組合員数 登録貸渡事業者 31 社

所属船腹量	貨物船	31 隻	30,277 重量ト
	油送船	4 隻	4,890 m ³
	台 船	1 隻	898 馬力
	合 計	38 隻	12,818 重量ト



山河理事長 (左) と池田事務局長

笠岡諸島の歴史とともに歩む

【組合の組織】

岡山県西南海運組合は、昭和 61 年 (1986) 11 月、ともに笠岡市内の神島地区海運組合 (組合員 19) と北木島地区海運組合 (組合員 8) が合併して誕生した。運輸省 (現国土交通省) の内航海運構造改善に呼応してのもので、神島地区海運組合、北木島地区海運組合とも事務局はそれぞれ発祥の地にあったが、新組合の事務所は白石島に置き、平成 12 年 (2000) 2 月に便のよい本土の笠岡市美の浜に移転した。また、平成 26 年 (2014) 6 月、全日本内航船主海運組合の所属であった笠岡地区海運組合 (組合員 19) が岡山県西南海運組合に統合し、笠岡地区海運組合は解散した (詳細は、前号・岡山中部海運組合編参照)。このとき、事務所を所在地の笠岡市五番町に移転した。組合事務所ビルの十字路を挟んで笠岡警察署と笠岡郵便局があり、市の中心街で JR 西日本の山陽本線「笠岡」駅から徒歩 17 分の場所にある。

岡山県西南海運組合の前身の地区事情について触れておこう。神島に産業が勃興したのは大正初期だった。中外商業新報 (日本経済新聞の前身) が昭和 13 年 (1938) 12 月 10 日付で報じた記事 (神戸大学経済経営研究所・新聞記事文庫蔵) によれば、「尼ヶ崎の乾式製錬小工場は、藤田組の援助によって技術を完成し、大正 3 年 (1914) 大阪亜鉛鋳業会社を組織、岡山県神島に製錬工場を設立した」とある。これが日本初の亜鉛製錬工場で、場所は神島の外浦地区だった。原料の亜鉛鋳石は、国内各地はもとより遠くインドネシア半島や南洋諸島からも輸入された。折からの第 1 次世界大戦 (大正 3 年 7 月～7 年 11 月 = 1914～1918) により、



中外商業新報の切り抜き記事 (神戸大学経済経営研究所・新聞切り抜き文庫より)

亜鉛精錬の需要が世界的に急増して空前の好況をもたらし、外浦地区は逐次埋め立てられ工場用地となって、労働者は島外から流入し1万人を超えたとされる。大正初期の笠岡町人口が1万人そこそこであり、現在の神島人口が外浦、内浦地区を併せても2,000人に満たないこととからみると、この狭い外浦地区の当時の活況は想像に余りがある。笠岡もその恩恵を受けて活況を呈し、市内には旅館が建ち並んで人が溢れ、人々は船で笠岡から神島へ渡った。神島の工場からの出荷製品は船で笠岡港へ移送され、一部は積み替えて貨車で全国に輸送された。しかし、好景気はいつまでも続かず、第1次世界大戦の終結で、大正8年(1919)には神島製錬所は閉鎖された。また、神島工場の操業に伴う亜硫酸ガスの放出で公害問題が起これ、工場側では有毒ガスの拡散防止策として大正6年(1917)に硫酸製造プラントを別会社として発足させたが、製錬の操業短縮を食い止めることはできなかった。

一方、神島では大正6年(1917)6月、大阪亜鉛製造所と硫酸肥料が提携して、無機化学メーカーの神島硫酸製造所(大正8年12月に神島人造肥料と名称変更)が設けられ、閉鎖された神島製錬所を譲受した。昭和11年(1936)2月に鐘淵紡績、藤田鋳業、神島人造肥料の共同出資により神島化学工業が設立され、戦後間もない昭和21年(1946)3月に神島人造肥料と神島化学工業が合併し、新たに神島化学工業となった。現在は子会社のコウノシマ化成が神島工場を買収し、関連業務を引き継いでいる。

昭和23年(1948)、任意団体神島運航組合が設立された。同組合は文字通り、戦前に地元に進出した神島化学工業から生産される肥料、硫酸、燐鉱石などを運ぶ専属船の海運業者で組織されていた。当初は地元の神島周辺の海運事業者が輸送にあっていたが、共和産業海運が神島化学の輸送元請会社として一本化されたため、神島工場に出入りの海運事業者は生き残るため、共和産業海運神島出張所の専属船として配下に入った。当時の運航組合は、神島化学工業の専属会社だけで構成され、組合事務所は神島化学の中に置かれていたので、荷主・船主ともいわばガラス張り、意思疎通が徹底され結束力も強かった。運航組合が窓口となって所属船の配船の適正化、金融・保険・購入用品・燃料などを斡旋・管理し、さらに所属船の用船料、滞船料など運航条件の交渉や運賃値上げ交渉をするなど、安定かつ活発な組合活動が展開されていた。

運航組合は昭和38年(1963)、内航海運組合法に基づき法人化し、神島地区海運組合として新発足した。組合員は運航組合の組合員60数社がそのまま移ったため、組合活動は従来通り活発だった。特に昭和40～41年(1965～1966)頃に運賃交渉で難航したときは、積荷拒否や全船係船ストによる実力行使で打開を図るなど、他組合にはない組合活動を展開している。同一事業者の専属船ばかりで、しかも地元を運航拠点にしていたからこそ出来たことだった。その意味では、規模は小さいとはいえ単一荷主の発展に支えられて来た特異な組合とも



事務局のある笠岡市 (Yahoo! 地図)



MKビル (上) と事務局



事務局入口

いえた。

ちなみに、神島地区海運組合の組合員が最初に鋼船化したのは昭和 35 年 (1960) で、600 重量トンの貨物船だった。その後、昭和 40 年代初めに S & B 方式前の最後に 199 総トン型が 1 隻建造され、以降徐々に木船から鋼船化への転換が進んだ。最後まで残っていた木船は 200 重量トン型だったが、昭和 55 年 (1980) に廃業とともに姿を消した。

神島地区海運組合は、昭和 48 年 (1973) 以降の 2 度にわたる石油危機、長引く海運不況、肥料業界の不振を背景に大きな曲がり角にさしかかった。特に瀬戸内海中央部、香川県の荘内半島と愛媛県高縄半島の間を占める海域である四国側の燧灘埋立と神島大橋の完成で、離島だった神島は陸続きとなり、神島化学工業で生産される貨物の大半が陸送に転換して行き、海運業が衰退する要因となった。

これに対し北木島地区は、地元産出の石材輸送を中心に海運業が発達した。北木島の石材は、天正 11 ~ 慶長 3 年 (1583 ~ 1598) の大阪城築城に際して石垣用に積み出した記録があり、江戸時代末の文久 2 年 (1863) には、京都を異国の侵略から守るために建造された西宮お台場砲台 (兵庫県西宮市) 用に供出され、明治時代になると神戸市の湊川神社境内の大石、東京の日本銀行本店や横浜正金銀行 (戦後は東京銀行 = 現三菱東京 UFL 銀行が事業継承) 本店の建築用、靖国神社の大鳥居や大石灯籠にも使われた。戦後は復興期、経済成長期に東京、大阪などの大都市圏で需要が増大し、北木島には採石事業者が 127 社もあった。しかし、その後は中国からの廉価な輸入石材に押されて産出量が激減し、現在では僅か 2 社を数えるだけに衰退している。

北木島地区船主の中には一部が戦前、九州炭の輸送に当たったケースもあるが、戦後も比較的堅調な需要に支えられ、昭和 22 ~ 23 年 (1947 ~ 1948) 頃も石材輸送に新造船を投入するなど、地元貨物中心の動きが強かった。北木島地区海運組合の設立は昭和 38 年 (1963) で、鋼船化は昭和 48 年 (1973) と遅かったが、これは阪神地区への近距離輸送が主になっているため運賃が安く、船員雇入れの余地などほとんどないので新造船が容易でなく、運航は家族船員に頼って来たことからだった。また、最近では土木埋立用捨石、建築資材が石材資源の枯渇で徐々に減少、これにフェリー網の急速な発展が追い打ちをかけることになったため、地元海運業者には大きな打撃を受けた。

前述のように神島地区海運組合と北木島地区組合は、合併で現在の岡山県西南海運組合として新発足したが、この合併で残った組合員も、埋立や橋の建設に伴う物流変化を背景に、徐々に衰退して行った。

岡山県西南海運組合の組合員は、令和元年 (2019) 10 月 10 日現在 31 社 (うち休業 3 社) で、組合員の全てが登録貸渡業者である。所属船腹量は貨物船が 31 隻、30,277 重量トン、油送船が 4 隻、4,890m³、台船が 1 隻、898PS の計 36 隻、36,065 重量トン・m³ PS。さらに主要貨物別に分類すると貨物船では鋼材が圧倒的多数を占める 28 隻、26,647 重量トン、石灰石が 2 隻、2,900 重量トン、鉍石類が 1 隻 730 重量トン、油送船では白油が 1 隻、1,230m³、ケミカルが 1 隻、1,230m³、油脂が 1 隻、1,200m³、過酸化水素等が 1 隻、1,230m³となっている。

現在では地元の貨物が減少したことから京浜、阪神、九州地区のオペレータと手を結び県外に進出して行った業者がほとんどであるが、組合員の 90% は笠岡諸島のうち大飛島、小飛島



笠岡諸島 (写真提供: PIXTAS)



笠岡諸島 (提供: PIXTAS)

の出身者で占められている。

また、組合員の所在地分布をみると全社が笠岡市内で、島嶼部では大飛島が10社、高島と北木島が各1社となり、本土に移った島嶼部出身者も少なくない。本土が所在地の組合員は19社となる。

笠岡諸島は、北北西から南南東に向かって連なる断層帯に沿って30以上の島々が連なるが、そのうち有人島は本土に近い側から高島、白石島、北木島、大飛島、小飛島、真鍋島、六島の7島で、瀬戸内海国立公園に指定されている。神島は笠岡湾の干拓により現在は本土と陸続きとなっているため、ここには含まれていない。

笠岡諸島では、縄文時代以降の遺跡が各島から広くみつかっており、中でも高島の王泊遺跡は古墳時代から奈良時代にかけて同島に製塩を手掛ける大集落があったことを示している。横島の対岸にあたる笠岡市西大島では、かつての海岸部から津雲貝塚が発見されたが、縄文時代の人骨が日本で初めて232体も大量に発見され、その後の発見も含めて全国で2番目に多い発見数で、国内の石器時代研究上、極めて重要なものになった。大飛島には奈良時代から鎌倉時代にかけての祭祀遺跡があり、上絵付けに鉛の白、銅の緑、哲の黄の3色の釉^{うわぐすり}を用いた低火度の焼き物の三彩器や、銅鏡が発見されている。これらは古代の遣新羅使、遣唐使や太宰府に下る役人が、航海の途上でこの島に立ち寄って神事を執り行った証拠とみなされ、笠岡諸島が古くから潮待ち、風待ちの瀬戸内海の要衝になっていたことを示すと考えられている。



昭和初期の神島外浦港



現在も残る北木島の石切り場 (写真提供: PIXTAS)

また、神武天皇が東征の際、笠岡諸島^{あんぐう}に行宮(天皇の行幸の際や一時的な宮殿)を設けて数年暮らしたとされており、これが神島にあったという説と、高島にあったという説がある。平安時代には笠岡諸島の土豪として真鍋氏(別名真名辺氏)の名が『平家物語』に記されており、室町時代中期から戦国時代には笠岡を交通の要衝として毛利氏や小早川氏が進出し、笠岡諸島は水軍の拠点となった。笠岡諸島は近世、備後福山藩の支配下となり、港湾が整備されて瀬戸内航路の要港として、西国大名の参勤交代路として頻繁に利用されており、北前船や樽廻船、菱垣廻船の寄港地ともなった。

笠岡地区では笠岡信用組合が内航海運企業に理解があり、家族乗船の一杯船主に対しても、設備投資も運転資金も便宜を図っている。地元船主によると「笠岡信用組合では、外航は信用できないが、内航は信用できると親身になってくれる。かつては中国銀行や広島銀行も利用していたが、不況期でも融資に応じてくれた笠岡信用組合を利用する船主が9割以上だ」という。それもあって、笠岡地区では家族乗船の船主でも建造意欲は比較的旺盛で、平成30年(2018)で組合員のリプレースをほぼ完了している。

岡山県西南海運組合では組合の決算を11月末とし、船主船長の多い組合員がより集まる機会の持てる12月30日に毎年通常総会を開催しているが、正月も乗船中で参加できない組合員を除いて、総会の出席率は90%を超え、皆が組合活動に積極的だ。

山河理事長は大飛島出身の三萬吉の社長で、鋼材運搬船を5隻、5,600重量トン所有しJFE物流、神協海運、御前崎海運に定期用船している。内航船員不足は近年、海に馴染の深い笠岡地区でも深刻。それというのも、地元市民でも内航海運に対する認知度が低いからでもある。山河理事長は近隣高等学校に毎年積極的に出掛け、内航海運のPRと求人につとめてい

る。今年も笠岡工業高等学校にも足を運んだが、「笠岡工業高校で毎年100人の卒業生に700人の求人がある状況で、なかなか容易ではないが、1人でも応募してくれれば、海洋共育センターで育成し、地元の船に乗ってもらいたいと思っている」という。

池田事務局長は、元出版社勤務からのUターンという変わり種で、それだけに今までにない視点からの取り組みで組合運営に当たっていることがうかがえた。船主船長が多いことから船員保険業務や運輸支局への届出・手続きなどを代行するのは日常業務で、それもあって海事代理士資格を取得している。「組合員が事業に専念し、維持発展できるようサポートするのが組合であり、それこそが役割・氏名だと考える。船主から『西南組合がないと困る』といわれるような取り組み、価値提供の出来る存在になることが目標」という。

海の守護神 笠神社

【文化と伝承】

笠岡市の航海安全の守護神に笠神社がある。JR西日本・山陽本線「笠岡」駅から徒歩8分、標高216mの応神山、別名笠目山（加佐目山）の麓にある。祭神は応神天皇と天照皇大神。地元では「八幡さま」とも呼ばれている。応神天皇を祭神とする神社は八幡社が多い。

笠神社の創建は不明だが、「神社略記」によれば、「永禄8年（1565）4月、笠臣命の勸請による」とされている。岡山県神社庁によれば、「鴨別命が功あって笠臣を名乗った」とされ、のちにこれが「カサメ」と変じて笠岡になったとされている。鴨別命は『日本書紀』で、神功皇后摂政前期に熊襲征伐へ遣わされた吉備の国の神祖とされる。天文年間（1532～1555）、村上天皇の後胤村上左近大夫隆重が笠岡の古城山に築城して以来、累代城主が崇敬して社殿を改築、祭祀を続けて来たと言われている。



笠神社(上)と航海安全の御守護札(右)



取材こぼれ話

「笠岡」異聞

笠岡市のホームページに、こんな伝説が紹介されている。応神天皇は、仲哀天皇と神功皇后の皇子として生まれ池溝開発、内政整備や漢籍、儒学、工芸などの先進文化を大陸や半島から流入させたことで知られる。その応神天皇が吉備の国に行幸された際に笠目山で狩をされ、風で笠が飛ばされたという。供をしていた鴨別命が「これは大獵の前兆で、この山の神が天皇に奉ろうとしているのです」と進言した。この日の狩は獲物が多く応神天皇は大層喜び、鴨別命に「笠別命」の名、別の説では「賀佐」が与えられたともされ、これが吉備の豪族「笠」氏の祖になり、のちの笠岡の元になったともされる。この日に飛ばされた応神天皇の笠は、山の麓の松の木に掛かっていたことから、これを「笠懸の松」と名付けて、ここに笠神社の前身の八幡神社が建立されたというのである。八幡神社は明治4年（1871）に「備中国本宮書記略」により、願い出て「笠神社」に変更された。残念ながら、笠神社山道の脇にあった笠懸の松は、明治7年（1874）に枯死したそうで、現在は残っていない。（中島）

【参考文献：岡山県大百科事典、岡山県史産業経済編、神戸大学経済経営研究所新聞切り抜き文庫、岡山県神社庁HP、笠岡市HP】